

本邦関節リウマチの現状と残された課題 －治療の進歩と間質性肺病変診断バイオ マーカーの開発－

座長 當間重人[†]第72回国立病院総合医学会
(2018年11月9日 於 神戸)

IRYO Vol. 74 No. 10 (441–443) 2020

要旨

関節リウマチは多発性関節破壊をもたらす原因不明の難治性疾患である。しかしながら病態の解析が進んだこと、また遺伝子工学の進歩があったことによりきわめて有効な抗リウマチ薬が次々と開発されている。ここ15年間でこれほど治療が進歩した疾患はそう多くないであろう。ただし、新規治療薬に有害事象を惹起してしまう面があることも事実であるし、関節外症状、とくに関節リウマチに合併する間質性肺病変の診断あるいは治療に関しては、ほとんど進歩がみられていないのが現状である。本シンポジウムでは、本邦における関節リウマチに関する変遷や現状を次々と明らかにしてきた全国規模のデータベースNinJa (National Database of Rheumatic Diseases by iR-net in Japan) からの報告、そして関節リウマチに合併する間質性肺病変の新しいバイオマーカー探索に関する報告を取り上げた。

報告からは、本邦における関節リウマチ診療が概ね好ましい方向へ向かっていること、しかしながら、悪性リンパ腫の合併発症が依然として多いことや間質性肺病変のより有用なバイオマーカー探索が必要であることが判明した。

国立病院機構を中心として構築されているNinJaネットワークを利用した観察研究や基礎的臨床研究は、今後とも発展できるし、発展させなければならない仕組みである。

キーワード 関節リウマチ, データベース, 間質性肺病変, バイオマーカー

関節リウマチ (rheumatoid arthritis : RA) の原因は不明のままであり根治療法は存在しない。そして多発性関節破壊により身体障害は進行し、患者本人のQOLを低下させるのみならず、日本の労働力低下を招きうる難治性疾患である。しかし、原因こそ不明ではあるが骨関節破壊に至る病態、および病態形成に関わる分子が明らかにされてきた。炎症性

サイトカインやその受容体、刺激共役分子、あるいは細胞内シグナル伝達分子などである。そして、遺伝子工学技術の進歩と相まって、これらの分子を標的とした治療薬が考案・開発され、その強力な抗リウマチ効果が確認されている。いわゆる生物学的製剤やJAK阻害薬などである。これらの新規抗リウマチ薬が日本で上市され始めたのは2003年であるが、

国立病院機構東京病院 リウマチ科 [†]医師

著者連絡先：當間重人 国立病院機構東京病院 院長 〒204-8585 東京都清瀬市竹丘3丁目1-1

e-mail : touma.shigeto.jy@mail.hosp.go.jp

(2019年4月12日受付, 2020年4月10日受理)

State-of-the-art Clinical Research in the Field of Allergies and Rheumatism

Current Status and Remaining Issues of Rheumatoid Arthritis in Japan :

Progress of Treatment and Development of Diagnostic Biomarkers for Interstitial Lung Disease

Shigeto Tohma, NHO Tokyo National Hospital

(Received Apr. 12, 2019, Accepted Apr. 10, 2020)

Key Words : rheumatoid arthritis, database, interstitial lung disease, biomarker